

平成30年6月7日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02268

研究課題名(和文) 冷戦アジアの「革命」とベトナム戦争における「日本語」の役割に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Role of 'Japanese language' with regard to 'Revolution' in Cold War Asia and the Vietnam War

研究代表者

高 榮蘭 (KO, Youngran)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：30579107

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：東アジアで「革命」と「ベトナム戦争」をめぐる言説が氾濫していた時期に、「日本語」が旧植民地・旧占領地において、軍事独裁への抵抗の言説を支える役割を担っていたことに注目した研究である。日本による東アジア諸国との国交正常化が経済的侵略を意味していたのは確かである。しかし、それを、東アジアの冷戦構図だけで捉えると、ベトナム・中国・韓国・などで生じた軍事暴力とそれに対する抵抗の言説から、同時に見られる、日本語の複雑な役割が見落とされてしまう。本研究は、この時期の「東アジア」の問題に、「日本語」(文学・文化)の役割の問題を節合させることによって、新たな思想的地図の構築のための土台作りができた。

研究成果の概要(英文)：This study explores the idea that in East Asia, at a time when a plethora of discourses on “revolution” and “the Vietnam War” were circulating, the “Japanese language” functioned to support discourses of resistance against military dictatorships in former colonies and formerly occupied areas. It is clear that Japan’s normalization of relations with the countries of East Asia meant economic invasion. However, if we simply view this through the lens of the Cold War in Asia, we may lose sight of the complex role that the Japanese language played with regard to the military violence that arose in countries like Vietnam, China, and Korea and the discourses of resistance to that violence. By articulating the role of “Japanese language” (culture, literature) with regard to “East Asia” during this period, this study has created a foundation for the construction of new ideological maps.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：ベトナム戦争 国交正常化 冷戦 検閲 文化翻訳 メディア 在日 植民地

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、日本の近現代における「思想・人・書物・制度」の移動が引き起こす、接触や衝突が「文学・文化」の変容にいかに関わっていたのかについて研究してきた。2012年度から2014年度に行った、挑戦的萌芽研究「東アジアにおける「文学・文化」の「闇」ルートと運動の力学をめぐる研究」(研究代表者、課題番号:24652051)、「検閲」と文学言説の統制をめぐる超域的文化研究(研究分担者、課題番号:24520235)を通して、1945年以前の帝国日本の領土内において、日本語・朝鮮語の書物や書き手の移動は、民族別・言語別の境界を侵犯する形で行われたものであり、そこには常に権力との攻防が刻まれていたことがわかった。とりわけ、権力による暴力的な「非合法」という烙印が、単純な抑圧の手段ではなく、抵抗の手段にもなりうること、しかも、それが抵抗のための資金を獲得するための商品になりえたのである。また、1945年の帝国日本の解体以後、東アジアは米ソによって再編されるが、その過程で旧植民地であった韓国と日本の間には「文学・文化」をめぐる様々な闇ルートが出来上がり、そこには韓国の軍事独裁政権への抵抗をめぐる、「人・書物・資本」の交錯が介在していたことを明らかにすることが出来た。この過程で、返還前の沖縄・ソウル・東京での文化運動に注目し、韓国・沖縄・東京への書物の流通ルートと文化(言葉)の移動にかかわる資料を集めたのだが、そこから浮上してきたのが、「帝国日本」とともに消えたはずの「日本語」を媒介としながら構成される軍事暴力と抵抗の言説である。

## 2. 研究の目的

(1) 冷戦期の東アジアにおいて、「日本語(文学・文化)」が如何に表象されたか。

ベトナム戦争:ベトナム戦争の従軍記には「日の丸」は命を保障する旗であったという記述が目立つ。日本の従軍記者はベトナム人と漢字による筆談を試みながら、完全な形ではないとはいえ、アメリカのメディアに從属しない報道を試みた。これらの記事から浮かびあがるのは、侵略者であったはずのベトナム残留「旧日本兵」に対するよいイメージである。これと対比する形で「敵」として位置付けられるのは、フランス・アメリカ・韓国である。このような、ねじれた構図については、当時大量生産された日本語メディアによるベトナム戦争従軍記を分析するとともに、韓国語、フランス語、中国語、英語圏で書かれたベトナム戦争関連の文学作品や従軍記を合わせて分析し、日本(文学・文化)とベトナム戦争の問題を明らかにしたい。

韓国軍事独裁と民主化運動:帝国解体以後、韓国の軍事独裁政権によって「非合法」という烙印が押された、「日本」からの「人・書物・資本(民主化のための秘密資金)」が、密航や亡命などの動きと交錯しながらどの

ように動き、韓国と日本の「文学・文化」にどのような変容を齎したのかについて注目する。1970年代に日本で金芝河に関する出版物の氾濫、朝鮮新聞購読運動、在日朝鮮人作家の浮上という文化的な現象は、1960年代の韓国における「日本文化ブーム」、国交正常化以後の「日本文化の禁止」と合わせて考えなければならない。ここには、日韓国交正常化、安保闘争、ベトナム戦争の文脈が如何にかかわっていたのかについて明らかにしたい。

(2) 冷戦アジアと「革命」アジアの思想形成における日本(文学・文化)の役割。

戦後日本の「運動」における Lenin (ロシア革命) という記号の分析:戦後日本における「帝国主義」批判は Lenin の議論の踏襲を所与の条件としていることが多い。しかし、それを「戦後」というコンテキストだけで分析すると植民地支配の記憶を忘却する可能性があることに気づいた。そのため、「革命」をめぐる議論は1905年、1917年ロシア革命が如何に日本で神話化されたのかについて明らかにしたい。

「革命」アジアにおける日本語(文学・文化)の役割に関する分析:東アジアにおいて「革命」は、暴力的な政権獲得の正当化のために使われた記号である。例えば、「明治維新」を夢見た朴正熙軍事独裁政権の「10月維新」時代、政府側のイデオログは京都学派の近代超克からの強い影響を受けている。それらの思想を背景としながら、「革命」理念は実行された。この「革命」に対する抵抗運動の理論「武装」、外部の思想との接触は、左派的思想を軸とするものであったが、厳しい情報統制下において「韓国語」による情報流通は不可能に近かった。そのため、多くの民衆運動家は「日本語」を媒介としながら思想の受容を行うことになる。すなわち、公式的には「日本文化禁止」の時代であったにもかかわらず、軍事独裁と抵抗運動の論理は「日本語」を参照軸としながら形成されたことになる。これらの現象を手がかりとしながら、当時の日本語メディアや日本語書物の朝鮮半島への移動に関する資料を分析し、当時の思想編成をめぐる新たな解釈を試みたい。

## 3. 研究の方法

具体的な研究の方向性としては、新しい研究をスタートさせるための研究資料の構築(資料の分析・調査・研究を含む)、ベトナム戦争、「革命」アジアに関する資料、日本語の書物のアジアへの流通情報、ベトナム戦争期に他の言語圏において日本語文学文化が如何に表象されていたのかなどに関する資料を分析するために、他の研究プロジェクトとの連携を図る。国際ワークショップを企画し、複数の言語による領域横断的な成果の公表を試みたい。このような作業を通

して、単なる個人研究の進展に留まらない、国内外の関連研究との繋がりを確保することが出来るだろう。その過程で、他の言語・専門の研究者からの専門的な知識提供が必要なのは言うまでもない。また、資料の調査に関しては、日本・韓国・米国の大学院生からの研究補助をうけることになるだろう。

#### 4. 研究成果

##### (1) 2015年度

2015年度は関連資料の調査をしながら、以下の二つに中点をおいて、研究活動を行った。

他の地域の研究者と東アジア冷戦と革命・抵抗運動をめぐる共同研究の基盤づくりを行った。ワシントン大学 E・Mack 准教授、韓国成均館大学の千政煥教授、大妻女子大学の五味淵典嗣教授と日本でワークショップ「カタストロフの記憶と表象」を開催した。2015年6月には、UCLA で開かれた“Trans-Pacific Symposium”に参加した。

国際ワークショップを企画・開催し、複数言語による領域横断的な成果の公表を試みた。『検閲の帝国』(新曜社、2014年)を韓国語読者向けに再編集し、2016年3月(プルン歴史社)に刊行した。韓国東亜大学と共催で国際会議「新冷戦秩序と憎悪の政治の歴史」(2016年1月9日)を開催した。6070研究会を計6回開催した。2015年4月25日、「出来事の残響 原爆文学と戦後沖縄文学」報告：村上陽子、コメント：大野光明・佐藤泉。5月29日「ベトナム戦争における 韓国人の脱走 密航者と日本の社会運動」報告：権赫泰、コメント：道場親信。6月26日「Women's Liberation and the Question of Decolonization : Nation, Race and Ethnicity Reconsidered」報告：Setsu Shigematsu (UC Riverside)。10月2日「1960年代における闘争の記憶とマイノリティの表象」報告：趙沼振、韓昇熹。12月11日「沖縄人と在日朝鮮人、みつめあいの「戦後」史」報告：林慶花、コメント：河口隆行。

##### (2) 2016年度

2016年度は関連資料の調査をしながら、以下の二つに中点をおいて、研究活動を行った。

他の地域や言語圏の研究者と東アジア冷戦と革命・抵抗運動をめぐる共同研究の基盤をつくった。ワシントン大学 E・Mack 教授、平野克弥准教授、UCR の Setsu Shigematsu 教授、韓国延世大学の金杭准教授、成均館大学の千政煥教授連携をとりながら、ワークショップを開催および参加した。“The Movement of Individuals and the Politics of Cultural Memory Symposium” (UCLA) “When Lit. Profs Walk the Nuclear-Restricted Zone Symposium” (UCI) “UCLA Trans-Pacific Symposium: The Politics of Life and Death” (UCLA) ワークショップ「嫌悪と民主主義」(延世大学・東京大学) “Empire and Others

Symposium”

複数言語による領域横断的な成果の公表を試みた。李惠京・Vladimir Tikhonov さんらとの共同研究の成果『1905年ロシア革命と東アジア三国の反応』(ソウル大学出版文化院、韓国語)が12月に刊行された。6070研究会を計3回開催した。6月24日、「三島由紀夫と60年代」報告：田尻 芳樹・遠藤不比人。9月30日「文化としての冷戦」報告：服部訓和・細田晴子。11月19日、「『平和なき「平和主義」 戦後日本の思想と運動』合評会」提題者：川口隆行・黒川伊織、著者の応答：権赫泰。

特に、これまで獲得できた、科学研究費のおかげで、『検閲の帝国』(日本語版：新曜社、2014年)韓国語版(プルン歴史社)も2016年2月に刊行できた。韓国語版は当時の朴槿恵政権の芸術検閲に対する批判を展開する上で参照すべき図書として大きな注目を集め、韓国『ハンギョレ新聞』によって2016年を代表する10冊に選ばれた。科研費をベースにしながら進められた共同研究が、日本だけではなく、韓国の文学・文化研究のなかで新たな議論の土台作りに大きな貢献が出来たことは大きな成果であった。

##### (3) 2017年度

2017年度は関連資料の調査をしながら、以下の三つに重点をおいて、研究活動を行った。

他の地域や言語圏の研究者と東アジア冷戦と革命・抵抗運動をめぐる共同研究を継続させた。UCLA で開かれた“Trans-Pacific Symposium”で発表した。グローバル出版研究グループ(ワシントン大学 E・Mack、成均館大学の千政煥、大妻女子大学の五味淵典嗣)は、朝鮮戦争とベトナム戦争の難民の拠点であった韓国釜山で現地調査と地域の専門家との懇談会を開いた。韓国延世大学の金杭(資金：韓国細橋研究所)、成均館大学の千政煥(資金：成均館大学 CORE 事業団)らと「日韓人文学フォーラム」を立ち上げ、日韓から10名の人文学者を招聘し、東アジアにおける「批判言説」のパラダイム転換について議論した。同研究資金との共催による国際会議「嫌悪と民主主義」を開催した。国立台湾政治大学日本学研究所と日大との共同研究企画に参加した。

複数言語による領域横断的な成果の公表を試みた。韓国聖公会大学研究チームによる共同研究の成果『二度目の「戦後」1960~1970年代アジアに遭遇した日本』(ハンウルアカデミー)を刊行。また、韓国京郷新聞社と共同でポスト冷戦時代の問題について考える連続企画に参加した。その成果は『週刊京郷』で発表した。

6070研究会を計3回開催し、研究成果の還元を行った。ワークショップ「太平洋を超

える歴史修正主義」：報告は平野克弥 (UCLA) コメントは山口智美 (モンタナ州立大学)。国際シンポジウム「再び戦後を問う」：報告は高榮蘭 (日本大学)・波平恒男 (琉球大学)・米谷匡史 (東京外大)、コメントは権赫泰・趙慶喜 (韓国 聖公会大学)、中野敏男 (東京外国語大学) 司会は鄭栄桓 (明治学院大)。合評会、村上克尚『『動物の声、他者の声：日本戦後文学の倫理』』：報告は結城正美 (金沢大学)・立尾真士 (亜細亜大学)・郷原佳以 (東京大学) 応答は村上克尚 (日本学術振興会特別研究員) 司会は紅野 謙介 (日本大学)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 【雑結論文】(計4件)

高榮蘭、「不良分子」の指紋と「朝鮮人」の位置づけから 高野麻子『指紋と近代』を手がかりに、『クアドランテ』、査読有、第20号、東京外国語大学海外事情研究所、pp. 17 - 26、2018年3月

高榮蘭、「1930年代、いま・ここの根っこを探して 出版帝国のプロパガンダ 「クールジャパンへの進化」」、『週刊 京郷』、査読無、1243号、京郷新聞社、pp. 64 - 66、2017年9月5日

高榮蘭「帝国日本の空間フレームと図書館 雑誌『朝鮮之図書館』(特集 図書館と文学：保存・検閲・スキャンダル)、『日本文学』査読有、65(11)号、日本文学協会、pp. 28 - 39、2016年11月

高榮蘭「「原爆」をめぐる想像力の枠組み ベトナム戦争と「アジア」言説を手がかりに」、原爆文学研究会『原爆文学研究』、査読無、14号、pp. 264-282、2015年12月

### 【学会発表】(計22件)

高榮蘭、「他者をめぐる翻訳-政治の力学 冷戦アジアにおける日本語空間の再編を手がかりに」、国際シンポジウム「東アジアの文学・文化研究の国際化とナショナルリズムの陥穽」、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏 東アジアにおける人文学の危機と再生」第2グループ主催、於早稲田大学(東京都)、2017年12月9日

高榮蘭、「出入国をめぐる文化政治と文学 アジア通貨危機と李恢成の韓国籍取得を手がかりに」、日本大学・国立政治大学共同ワークショップ、国立政治大学台湾文学研究所・日本大学人文科学研究所総合研究「「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究 東アジアの言語・文化・表現史を中心に」共催、於国立台湾政治大学(台湾、台北)、2017年12月1日

高榮蘭、「絶叫と沈黙のあいだ 「文学・記憶・女」の移動を軸に」、シンポジウム

「ディアスポラ文学と想像力」、第5回 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 2017 ソウル大会、東アジアと同時代日本語文学フォーラム・他主催、於東国大学(韓国、ソウル市)、2017年10月28日

高榮蘭、「日米地位協定 第9条「軍隊構成員などの出入国」をめぐる」、シンポジウム「日米地位協定から見える沖縄・日本・世界」、「戦後沖縄・歴史認識アピール」のつどい2主催、於早稲田大学(東京都)、2017年7月15日

Ko Youngran, The Korean Peninsula and the Nuclear Threat: through the medium of literature, "Third Annual UCLA Trans-Pacific Symposium: "Kizu・傷/Wounds", Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, Center for Korea Studies, JUNE 10th 2017, at UCLA (LA USA)

高榮蘭、「「ジェンダー」と「朝鮮/日本」の危うい関係 『戦後の誕生』・『平和なき「平和主義」』を手がかりに」、国際シンポジウム「再び戦後を問う」、科研費基盤研究C「冷戦アジアの「革命」とベトナム戦争における「日本語」の役割に関する研究」主催、於日本大学文理学部(東京都)、2017年5月14日

Ko Youngran, Japan is Nobody's Ally: Memories of Empire and the Story of 'The Korean War', "Empire and Others Symposium", Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, the Department of Asian Languages and Cultures, March 21th 2017, at UCLA (LA USA)

高榮蘭、「言語圏の重なりと移動 『指紋と近代』から」、シンポジウム「近現代東アジアの人流統治を問い直す～帝国の力が重ね書きされた場所で～」、科研費基盤研究A「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティブ」、科研費基盤研究C「琉球政府の政治的主体性をめぐる戦後沖縄政治社会史の再構築」共催、於東京外国語大学(東京都)、2017年3月4日

高榮蘭、「多言語のなかを生き抜く女たちと「文学」」、於日本女子大学(東京都)、2016年11月22日

高榮蘭、「ハンガン『少年が来る』を読む」、CHEKCCORI 読書会・CUON 出版社主催、於CHEKCCORI (東京都)、2016年11月15日

高榮蘭、「「漢字」「文化」を攪乱せよ 多和田葉子『飛魂』から」、シンポジウム「多和田葉子と言葉のざわめき」、日本大学国文学会、於日本大学(東京都)、2016年9月22日

高榮蘭、「検閲帝国日本の非合法的な公論場 1930年前後、「抵抗」言説の商品化を中心に」(韓国語)、第9回奎章閣韓国学国際シンポジウム「権力と反対 韓国学を通してみる過去と現在の朝鮮」、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院主催、於ソウル大学校(韓国、ソウル市)、2016年8月19日

高榮蘭、「戦後レジームと女性たちの歴史戦争」第37回社会人文学ワークショップ「嫌悪と民主主義」、韓国延世大学国学研究院HK事業団、於東京大学（東京都）、2016年7月27日

高榮蘭、「帝国日本の戦争と書記言語をめぐる攻防」、UCR The Summer Study Abroad Program at Josai 主催、於城西国際大学（東京都）、2016年7月19日

Ko Youngran, "Border Transgressions within the "Hinomaru": 1989, The Desire for the "End", and Contemporary Japanese Literature," "UCLA Trans-Pacific Symposium: The Politics of Life and Death", Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, Center for Korea Studies, JUNE 4th 2016, at UCLA (LA USA)

Ko Youngran, UCI, A Round Table Discussion "When Lit. Profs Walk the Nuclear-Restricted Zone Symposium", 27 April 2016, at UCI (LA USA)

高榮蘭、「「平民」行商たちの情報戦 革命時代における日本語メディアの抗争」、『検閲の帝国』刊行記念講演会、韓国成均館大学東アジア学院・プルン歴史社共催、2016年3月26日、於プルン歴史アカデミー（韓国ソウル市）

Ko Youngran, "Korean Tenkō and the Japan-Okinawa Divide: Between Yoshimoto Takaaki's "On Tenkō" and Kim Talsu's "The Trial of Pak Tai", "The Work of "postwar" Workshop", 18 December 2015, at New York University (NY, USA)

高榮蘭、「「社会主義」と「転向」をめぐる文化政治 一九三〇年前後の「社会主義」書物をめぐる競争／狂騒をてがかりに」2015年度日本近代文学会秋季大会、特集「移動と空間をめぐる想像力」、2015年10月24日、於金沢大学（石川県）

高榮蘭、「「原爆」をめぐる想像力の枠組み 朝鮮戦争とベトナム戦争を手がかりに」第48回原爆文学研究会「戦後70周年連続ワークショップ」原爆文学研究会主催、2015年8月2日、於長崎大学（長崎県）

①高榮蘭、「革命と転向 吉本隆明「転向論」と林鐘國「親日文学論」の間から」、国際シンポジウム「日本の戦後70年を問うー戦後思想の光と影」、日仏会館フランス事務所主催、2015年7月19日、於日仏会館（東京都）

②Ko Youngran, "Hiroshima," "Kwangju," and the Appropriation of Memory: The Anti-Nuclear Movement and Support for Korean Democratization in the 1980s," "UCLA Trans-Pacific Symposium", Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, Center for Korea Studies, 5 JUNE 2015, at UCLA (LA, USA)

〔図書〕(計6件)

高榮蘭、「グローバル戦略と「在日朝鮮人／ニューカマー」作家をめぐる文化政治」、慶熙大学校日本学論集刊行委員会編『談論と表現の日本学(韓国語)』J&C、2017年11月、全599頁(担当pp. 223 - 254)。

高榮蘭、「ベトナム反戦運動」(pp. 91 - 95) 「検閲と表現」(pp. 128 - 132) 「朝鮮半島と核危機」(pp. 193 - 197) 川口隆行編『原爆を読む文化事典』青弓社、2017年9月、全388頁

高榮蘭、「「原爆」をめぐる想像力の枠組み べトナム戦争と「アジア」言説を手がかりに」、権赫泰・他編『二度目の「戦後」1960～1970年代アジアに遭遇した日本(韓国語)』ハンウルアカデミー、2017年6月、全331頁(担当: pp. 267 - 294)

李惠京・Vladimir Tikhonov・林慶花・黄載文・高榮蘭編『1905年ロシア革命と東アジア三国の反応』ソウル大学出版文化院(韓国語)、2016年12月、347頁

高榮蘭、「革命と転向 吉本隆明『転向論』と金達寿『朴達の裁判』のあいだから」(担当箇所 pp. 221-231) 三浦信孝編、風行社、『戦後思想の光と影 日仏会館・戦後70年記念シンポジウムの記録』2016年3月、全359頁

紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李惠鈴編、プルン歴史社、『検閲の帝国 文化の統制と再生産』2016年2月、全648頁

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高 榮蘭 (KO, Youngran)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号: 30579107

